

## ～上総(かずさ)掘りNGO\*の活動と 青年海外協力隊員の報告から～

開発途上の国々においては、水くみはとても重労働です。片道数kmの道を、頭にバケツをのせて、暑い日も雨の日も、女性や子どもたちが一日何回も往復しています。その結果、一日の大半をこの水くみに費やし、学校へ行く時間さえない状態です。

しかし今、千葉県で明治時代に考案された井戸を掘る技術が、アフリカや東南アジアで多くの人の役に立っています。わずかな人数と簡単な仕組みで、とても深い井戸が掘れる「上総掘り」の普及を通し、開発途上



水をくむアフリカの女性

国の人々の生活向上に日々汗を流している人がいます。この活動をしている NGO の代表をおおのあつし務める大野篤志さんに聞いてみました。

\*NGO = 国際協力に携わる「民間団体」のことです。



大野篤志さん

わたしたちは、ただお金や物をあげるのではなく、水に困っている地域の人々に上総掘りの技術を提供して、途上国の人々とともに井戸を掘り、自立のお手伝いをしています。上総掘りは千葉県が世界に誇れるすばらしい技術だと考えています。  
[インターナショナル ウォーター プロジェクト (IWP) 代表]

自分の持っている能力や技術をどう生かすのか。その答えを海外に見いだす若い人たちもいます。青年海外協力隊の人たちです。今までに3万人以上が日本を飛び立ち、現在も2,500人以上の若者が80か国を超える国々で活躍しています。2年間の勤務を終えて帰国した2人は何を考え、何に感動し、どんな汗や涙を流したのでしょうか。



しろはし  
白橋めぐみさん  
派遣国：シリア  
仕事：水泳指導

高校時代まで水泳一色の生活をしてきたわたしにとって、引退した後、なかなか次の目標が見いだせませんでした。大学で国際関係を学んだことがきっかけとなり、青年海外協力隊に参加しました。シリアでは水泳指導を通して、現地の人とかかわり、異文化に触れることができました。自分の特技を生かして新たな目標と意欲が得られたことに感謝しています。



たかはししゅうじ  
高橋修治さん  
派遣国：マラウイ  
仕事：農業指導

わたしは、エイズ孤児の集まる施設で野菜栽培を普及する仕事をしていました。何かを提案してもうまくいかず、思うように前に進みませんでしたが、現地の人にはわたしを信頼してくれました。

この2年間の活動を通して、異文化を実感し、日本で育った自分とマラウイの人々の違いを理解し合い、認め合うことの大切さと難しさを学びました。

(課題) 3人の活動について考え、共通する思いは何か、話し合ってみましょう。